

はじめに（研究の動機と目的）

競技スポーツ選手を支えるスポーツサイエンスの多くが競技力向上のサポートを目的としている。また最近では、タレント発掘といった方面にもいくつかの関連領域が基礎資料の積み重ねに着手し始めている。これらの研究はいずれも「競技期」に関わるものであり、競技スポーツの“表の世界”を扱っていることである。しかし、競技期以後の元スポーツ選手へのサポートについては研究・実践面での不足が感じられる。これは競技スポーツの“影の世界”の一つであり、両面にバランス良く関わっていくべきである。周囲のサポートがこのような状況にあることより、スポーツ選手自身がさらに表の世界に偏りがちになっても仕方がない。少なくとも選手を取り巻くスタッフは、ライフサイクルを視座におきながらそれぞれの専門性をとおしてサポートを実践していく必要がある。

すでに欧米を中心として、代表クラスのスポート選手の引退後の援助プログラムがいくつか開発され施行されている。今のところそれらのプログラムがどのように利用され、実効をあげているのかを情報として得てはいない。そのプログラムを紹介する活字をとおして感ずることは、非常に表層レベルでの適応を目指しているように感じられることである。スポーツ選手の引退後の支援は、個人・社会の両側面から行われるべき課題のように思われる。まだまだそのための基礎資料が出揃っていないわけではない。特に、我が国においては、関心は向けられるものの具体的な動きを認めることができない。

本研究課題であるスポーツ選手の「競技引退」に対しては、平成6～7年度に科学研究費からの補助を受けていた（題目：競技引退後の同一性再確立の過程）。その時の報告書の「あとがき」に筆者は次のように記していた。「＜略＞引退後の歩みを積極的なものにするには、選手自身がいかに“良い終わり方”をするかが大切となる。そして、“良い終わり方”をするには、競技期をいかに過ごすかが関係している。今のところ明確な主張をできるまでにはなっていないが、彼らのライフサイクルを頭の隅におきながら共にしていかなければならない。」。もっと長い人生のスパンで取り組む課題であることを意識しながらまとめたことを憶えている。

その後もこの研究課題については継続していつも身近においてきた。特に、研究協力者の一人である豊田則成君（現筑波大学大学院体育科学研究科）は自身の博士論文のテーマとして筆者以上に精力的に独自の立場から取り組んできている。筆者においては、当時、現役アスリートであったクライアントの一部がその後も引き続き相談室を利用している者が何人かおり、臨床の場でも競技引退の課題に関わる機会を与えられるようになってきた。そのような時、平成9～11年度の3カ年にわたって再び同研究補助の了承を得ることがで

きた。

新たな研究計画では、前回残した課題だけでなくスポーツ社会学領域からの応援を願い、心理・社会学の両面から接近を行った。長いスパンの中で競技引退の問題を理解すること、そして個だけでなく社会といった幅広いスパンで捉えるべきであると。

心理面からは、プロスポーツ選手のキャリア移行、中年期を過ぎた元オリンピック代表の経験をもつ者などに対象を拡大した。また、相談室をとおして競技期・引退期・再適応期と長きにわたって継続した事例の検討も加えることにした。そして社会学からは、家族構造、地域的スポーツ文化の様態、学校文化などとの関連で競技歴の中に埋め込まれた競技者の社会構造要因の分析に注目した。特に、社会構造要因として際立った特徴をもつことが予想された韓国国家代表クラスの元競技者を対象者として考えた。幸い、スポーツ社会学領域で競技引退の研究に関心を寄せていた韓国留学生・金大勲君（現筑波大学大学院体育科学研究科）の研究協力を得ることができ、現地調査を実施することができた。比較文化的な研究まで拡大することはできなかったが、文化を異にする元競技者の生育歴等に触れたことは、貴重な経験となった。

本研究計画の分担者である松村和則氏（スポーツ社会学）もまた個別事象（事例）に関与しながらの資料収集、分析、理解を主要な研究法として採用する立場にある。したがって、本研究の中での主要な資料は事例研究によっている。競技引退後の心理・社会状況を知るには、質問紙調査法を中心とした操作的アプローチもあるが、それでは表層の一般的傾向を捉えられるにすぎないと考えた。この方法では想定した各変数の数量化を可能とし、それらの変数間の関連の「程度」を統計的に求めることができる。しかしながら競技期から再適応期までの間に各変数がどのように関係したのかを明らかにしようとすると、それでは限界がある。むしろそこでは各変数が当該事象（選手）にとってどのような「意味」があったのかを了解していくことが大切となる。できるだけ「個の全体性」に沿いながら背景にある意味を明らかにすることによって因果関連の説明に近づくことができるはずである。

同時に、研究者らは個々の事例に深く関わることによって、活字にすることのできない数多くのことをこの研究を通じて学んだといった思いを強めた。中でも、韓国での実地調査では、将来に向けた国際比較研究への足がかりを得ることができた。さらに筆者個人としては、日々の心理臨床活動では現役アスリートに接することが中心となっているが、競技期の過ごし方をあらためて考えさせられることがしばしばあった。

いずれ必ず競技引退は訪れる。この研究をとおして感じたことの一つに、スポーツ競技者の引退は、多くの平均的なライフサイクルの中で訪れる「中年期危機」とイメージレベルで重なり、それが通常よりもかなり早期に訪れたのではないかというものであった。競

技引退後，実業団に所属している選手は職場に復帰し，そうでない選手には何らかの就職先を紹介するといったレベルではこの問題の本質的な解決とはならないようである（“背に腹は代えられない”とは言いが．また，とりあえずの歩みの中で解決することもあるが）．外的なレベルでの大きな変化と同期して内的にも大きな変化が生じていることは言うまでもないことではあるが，周囲はその方面への配慮が不足している．競技引退によって，元アスリートたちは想像以上の内的な組み替えを強いられているのである．

最後に，本報告書の構成について若干触れておくことにする．

1・2章ではスポーツ心理学そしてスポーツ社会学のそれぞれの領域における先行研究の概観を行い，以後の研究の課題を導いている．3章では，プロサッカー選手を対象としたキャリア移行についての調査結果を紹介している．そして続く2つの章では，元競技者への面接調査により，引退後のアイデンティティ再体制化に関わる要因の解明（4章：心理学）や韓国元代表選手のライフヒストリより社会化の過程における身体キャリアの移行（5章：社会学）について分析している．さらに6章では，長期にわたった心理サポートの記録から引退後の再適応過程の分析を試みている．後半の実証研究では，同種の課題に対するこれまでの操作的研究で導くことのできなかった新しい知見を提出している．

なお，事例としての掲載許可を基本的には各協力者から得てはいるが，記述にあたってはできるだけ匿名性を配慮した．本報告書を手にしていただいた方には，扱いにはくれぐれも注意していただけることを強くお願いしたい．また，種々の角度からご批判，ご助言をいただけることを願っている．

平成12年3月20日

研究代表者

筑波大学体育科学系 中込四郎